月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.06



零の軌跡 四つの運命

旧市街で起きた抗争の結末は!?

苦悩するレーヴェに
授けられた新しい力
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

あの人気キャラクターが学園に登場！
みんな集まれ！ ファルコム学園

啄木鳥しんき
イラストメッセージ

いよいよ『空の軌跡 THE ANIMATION』の
詳細が明らかに！
ファルコムニュース

インデックス『イース ネクサス』ディレクター
川村円氏インタビュー



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

イース ネクサス

株式会社インデックス　ディレクター
川村円氏インタビュー

**ついに日本ファルコムの人気タイトル『イース』がソーシャルゲームに！
GREEで繰り広げられている新たな『イース』ワールドについて、
ディレクターの川村円氏に話を伺った！**

——今回ソーシャルゲームとなった『イース』シリーズはPCゲームから始まり、今なお様々な展開を見せている人気シリーズです。まず最初にご自身とファルコム作品との出会いをお聞かせください。

川村円氏（以降、川村　敬称略）：『イース』はもう20年前から始まってるゲームなんですけど、僕自身本当にPC-88で出たときからプレイヤーとして遊んでたことがありまして。PCゲームを何回かやってその後少しゲームから離れてたんですけど最近またPSPで『イース』などが出てきて、そういった意味では昔から知っていて馴染みがある作品だったということで、このお話を聞いた時は非常に嬉しかったですね。やってみたいな、ということで会社の中で手をあげたので。『空の軌跡』はコマンド式で若干ゆったりめなんですけど、ファルコム作品はどうしてもアクション性が強いというところがあったりとか、特に『イース』なんかはそうですね。やっぱり爽快感のあるアクションとかサウンドがすごく良いというところがありまして、プレイしていて気持ちいいという点ですごく好きな作品でした。

——ファルコム作品の中でも特に思い入れがある作品がありましたらお聞かせください。

川村：PC-88版『ザナドゥ』。初めて買ったRPGで、小学生だったのでゲーム内容はほとんど理解できていないままプレイしていましたが、ゲームディスクが壊れてしまったときに有償修理を日本ファルコムさんにお願いしたところ、ザナドゥグッズが沢山ついて戻ってきたことが子供ながらに感激したことを覚えています。

僕自身本当にPC-88で出たときからプレイヤーとして遊んでたことがありまして。


アドル

——今回、数多あるファルコム作品の中から、『イース』を『イースネクサス』というソーシャルゲームをにしようとなったのは、どのような経緯だったかお聞かせください。

川村：弊社側がソーシャルゲームを本格的に始めようとした時には版権ものがあまり多くはなかったので、そこから力を入れていこうとしたんです。その時にはまず有名なゲームをしようと。元々弊社のほうで『ペルソナ3』のソーシャルゲームの実績があったので、それを活かせるRPGで有名なタイトルをやっていったほうがいいんじゃないか。20年以上も過ぎてる『イース』っていうと「ああ、イースね」みたいな感じであるんじゃないか、というところでまずは日本ファルコムさんにご提案をしま


リリア

した。

——ソーシャルゲームという形に変わるということでファルコムさんのほうからの提案など、打ち合わせではどのようなお話をされたのかお聞かせください。

川村：まずは最初にお会いした時は企画のざっくりした話とソーシャルゲームってこういうものなんですよ、というご説明をさせていただきました。どうしてもコンシューマーと携帯ゲームは差がありますので、そういったところで何ができるかというところをご提案しました。最初に僕自身が企画を立てる時に悩んだのは今までのキャラクターとか舞台とか、そういったところを登場させるべきか否かという点だったんです。やっぱり『イース』だとシナリオとキャラクターがきちんとある。『イース』というゲームはアドルという主人公がいてこそなので、やっぱりユーザーさんの既存のキャラクターに対する想い入れは強いタイトルではあると思います。そこに深入りしてしまうと、続編が今後あったような時に影響を与えてしまうのは良くないと思ったんですね。ただそれを完全に排除してしまうと『イース』らしさがなくなってしまう。そこを僕自身とても考えて、結局ストーリーには深入りしない、オールスター的な形でやっていきたいとお話しました。その中でキーワード的なもの、例えばアイテムとかこれまでの『イース』の歴史とか深入りしないほうがいいような箇所をファルコムの近藤社長にアドバイスをいただきつつ、打ち合わせの繰返しの中で形にしていきました。昨年の10月くらいの話です。まさに『零の軌跡』を発売したあたり

僕自身が企画を立てる時に悩んだのは今までのキャラクターとか舞台とか、そういったところを登場させるべきか否かという点だったんです。


テラ


ドギ

で、ファルコムさんに「実は僕も『零の軌跡』をやってます」みたいに（笑）。ソーシャルゲームの人がいっぱいいる中で皆が主人公じゃなくちゃいけないっていう話から、じゃあアドルは助っ人役みたいなところにして、自分自身は別の冒険家としてそこにいる、という世界観で作らせていただきました。

——オリジナルの冒険者となって『イース』の世界に降り立つというところからスタートとなるんですが、あらためてソーシャルゲームでの『イース』についてお聞かせください。

川村：先ほど話した通りひとりの冒険家として世界にいることになるんですが、アドルとかは冒険家にとっては超人で憧れ的な存在であるわけで、ひとりじゃ当然力が及ばないと。でも魔物がたくさん出てきたりした時には指をくわえて見てるんじゃなくて、皆で力を合わせて何とか魔物を倒していこうというのが一連の流れになります。ソーシャルゲームの仲間を集ってパーティーを組んで、というよくある流れをもうちょっと大きくしたいな、と。そこで思いついたのが〝ギルド〟ですね。『イース』の大陸の中でギルドがいくつか存在していて、プレイヤーはそこに属して皆で協力して戦っていく、他のユーザーのつながりというところをまず見せていきたいなと思いました。そこが基本的にこ



戦闘開始



攻撃メンバー



マイページ

のゲームの一番の魅力になっていて、シングルプレイじゃなくて皆でプレイするといい物がもらえるとか、経験値がたくさん入るという点でギルドを盛り上げる『イース』を目指しました。

――魔物を退治するというもっとも冒険者らしいこと以外にも、どういった楽しみがあるのかお聞かせください。

川村：魔物を倒すためには強くならなければいけない、強くなるにはじゃあ武器の合成をしようというところが次のメインコンテンツになりますね。ミッションをこなしていくといろんなところで合成に使える素材が手に入ります。それを組み合わせて合成することによって強い武器になっていく、先に進むには強い武器が必要になりますから、武器を作りながら魔物を倒していくことが楽しみ方となります。その中でも珍しい素材を使うと皆が持ってないような武器になりますとか、今後も色々と考えていきたいと思っています。



アイシャ



クリティカル攻撃

――アドルたちはそこにそのような形で関わってくるのでしょうか。

川村：アドルやドギ、ガッシュ、それからアイシャなど戦闘ができるキャラクターは攻撃のサポートをしてくれるような役割りとなっています。たとえばドギだと打撃の属性、アイシャであれば射撃の属性といった具合に自分の装備の属性に応じてサポートしてくれる形です。ヒロインなどに関しては応援でHPを回復してくれたりですね。

――ソーシャルゲームとしてオススメの遊び方などありましたらお聞かせください。

川村：現在の時点ではまだ実装はされていないんですが、ギルドの対抗戦というのをやろうと思っています。そうなってくると今度は自分の強さだけじゃなく、初心者ユーザーさんを助けることでメリットが出てきたりといった仕組みを考えています。誰かを助けるといったところでより盛り上がっていくという感じですね。ギルド戦ということで魔物とはまた違った、プレイヤー同士の戦いになってきます。そのギルド戦も結構悩みまして、『イース』の世界で人間同士の団体で戦う世界観がありえるのかと。なので強力な魔物を出して、どのギルドが最初に倒せるかで競わせる形などを考えています。


ガッシュ

――今後実装したい企画などを持っていった時は、ファルコムさんはどのようなリアクションをされるのですか？

川村：結構色々とつっこまれるかな、と毎回思うんですけど「こういう理由でこれをやりたい」と、きちんと裏づけがあると納得していただけますね。プラスで「ここ見せるとイースファンには喜んでいただけます」とかアドバイスをしていただいたり、すごく受け入れてくださるところでとても助かっています。

――現在は6月からサービスを開始して約1ヶ月が経ちましたけれど、ゲーム内ではどういう形に進んでいるところでしょうか？

川村：最初に入ってきてくれたユーザーさんがリーダー的な立場になって、それぞれのギルドを引っ張っていってくれているのはすごく感じているところですね。そこがソーシャルゲームの良いところだと思うんですけど、こちらが何もイベントを開催していない時でも「何時集合で皆で魔物狩りに行こうよ」とか公式コミュニティに書き込んだりしてぐいぐい引っ張っていってくれています。

最初に入ってきてくれたユーザーさんがリーダー的な立場になって、それぞれのギルドを引っ張っていってくれているのはすごく感じているところですね。

オルハ


一番最初に参加された方は『イース』を知っている人も知らない人も混在していて、でも冒険者になりたい、ギルドを引っ張っていきたいと思っている方々ですね。

――携帯電話というものはユーザー間ですぐやり取りができるツールですが、そういう形の中ではどのようなリアクションが返ってきていますか？

川村：僕らもGREEに設置されている掲示板の中のユーザーさん同士の雑談や運営に対する意見を拝見して、参考にさせていただい



ています。中には厳しいご意見ももちろんあって、そこは真摯に受け止めて今後の改善部分に役立てていこうと思っています。そういうところは常に前向きになるべく早い段階で改善していこうという形で進めています。

――『イースネクサス』というゲームを今後どのような形で展開されていこうと思われていますか？

川村：まだ武器の種類が少なかったりしますので、既存の部分の厚みを増していきたいと思っています。後はファルコムさんにご相談の形になってしまうんですけども、現在のミッションは基本的に今までの『イースⅠ』から『イース7』までの土地を回っていくような進行になっています。それ以降は今まで出てこなかったところを、ソーシャル版オリジナルストーリーやオリジナルキャラクターなどでやっていけたりできたら、また違う『イースネクサス』独自の世界観を築けていけるんじゃないかなということを考えています。

――では最後にこのインタビューを読まれる方々にひと言お願い致します。

川村：今までの『イース』シリーズとはまた違う部分の『イース』を楽しめるコンテンツになっていますので、ぜひ今度は団体プレイを楽しめる『イース』を楽しんでいただきたいと思います。



ゲラルディ



ヴァジュリオン

遊び方

今すぐGREEの会員になって左のQRコードにアクセス！

川村 円

株式会社インデックスでソーシャルゲームの開発ディレクションを担当。現在はイースにどっぷり浸かってます。


ヨシュアは濡れてない？
平気だよー
それにホラ レーヴェ
？
ギュッ
みんなでくっついていれば
あったかいわ


ねぇ レーヴェ
まだ雨止まないのかしら
レン早く帰りたいわ


もう少し待とう
じきに雨足もひく
ぷー
レーヴェ ヨシュアは今日はもどってくるかしら
ん…
そうだな…
次は単独で行動することになった
遊撃士の暗殺だって


…あれから何日も経つがヨシュアは戻ってこない
……
レンはヨシュアが好きだな
ええ
ヨシュアはレンにやさしいもの
レンはやさしい人が好き
レーヴェも大好きよ
やさしくてとっても強いから
優しくて強い…か
君の愛する人は　強かったんだね


…まだまだ
俺は
俺は
カリンが
最後に笑っていた
意味を
まだ知らない
…カリン
なぜ お前は
あの無念の中で
笑って――…
ザァ


ザァ
ぱしゃッ
漆黒の牙…
任務は失敗
したか
その傷では
ロクに動けまい
おとなしく
我らに狩られるが
いい！
ぱしゃ
結社の…
差し金か…！
――やれやれ
諦めが
よすぎるぞ
…勝手に
すればいい…！
！
っと！
ドゴッ


飼い主に伝えるがいい
この坊主の身柄は俺が預からせてもらう
どういうことだ！

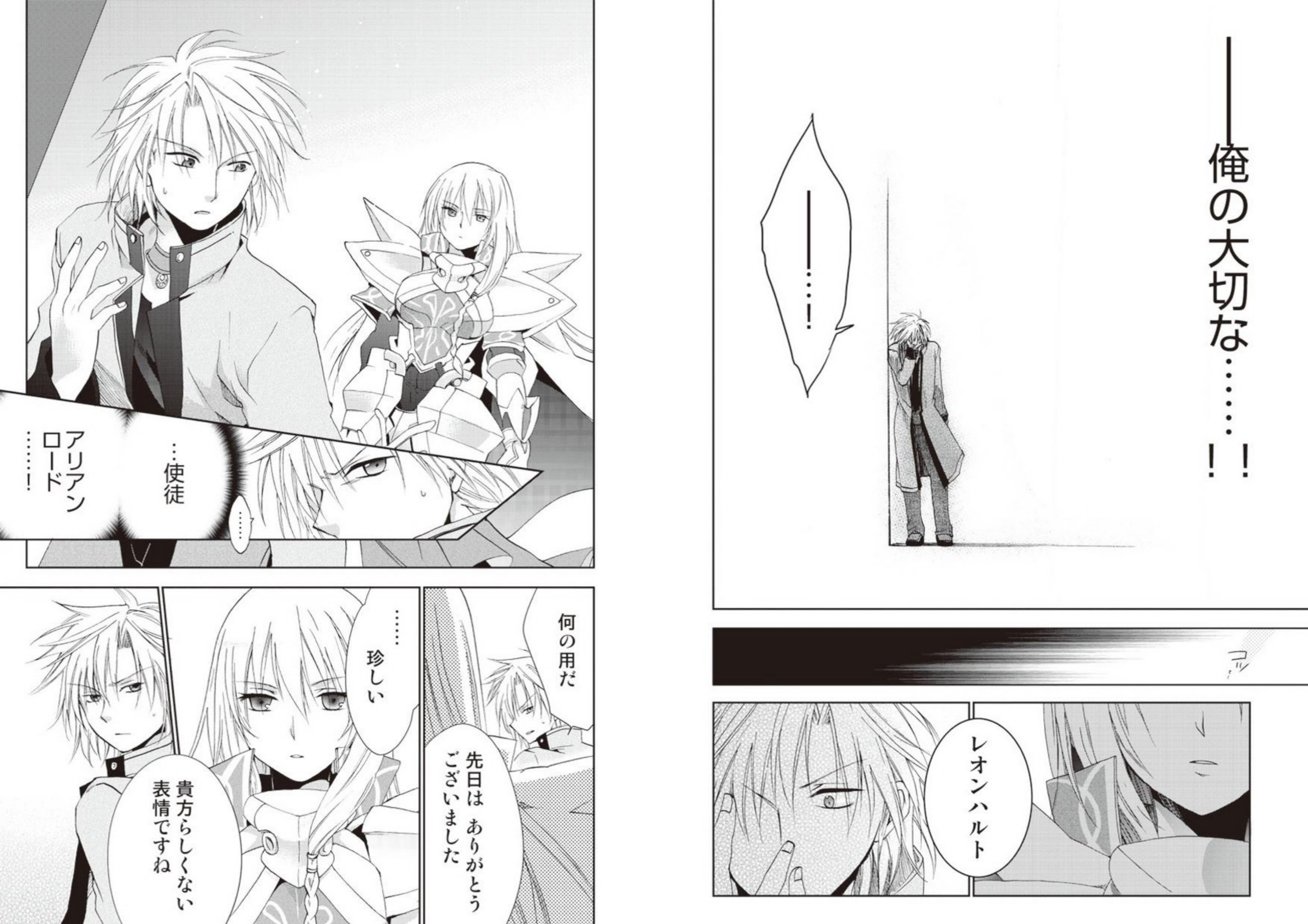

どういうことだもなにも ヨシュアが暗殺に失敗し
標的であるカシウス・ブライトに捕獲されただけだ
カシウス・ブライトといえばリベールの《剣聖》！
そいつの元にヨシュアひとりで向かわせるなんて聞いていない！
ぱしっ
「ヨシュアひとり」それが重要なのだよ
カシウスという男は力の及ばない暗殺者を返り討ちにはせず保護する――というね
!?
すべて思惑どおりだ
そして それこそが我々の目的なのだ


カシウスに捕まったヨシュアに情報を送らせる
いわば草（スパイ）さ
…ヨシュアは結社の人間だぞ
そうさ
結社の人間であろうとなんであろうと使えるものは利用する
それが我ら《身喰らう蛇（ウロボロス）》だ
目的のためには少々の犠牲はつきもの
古来よりのセオリーではないかね？

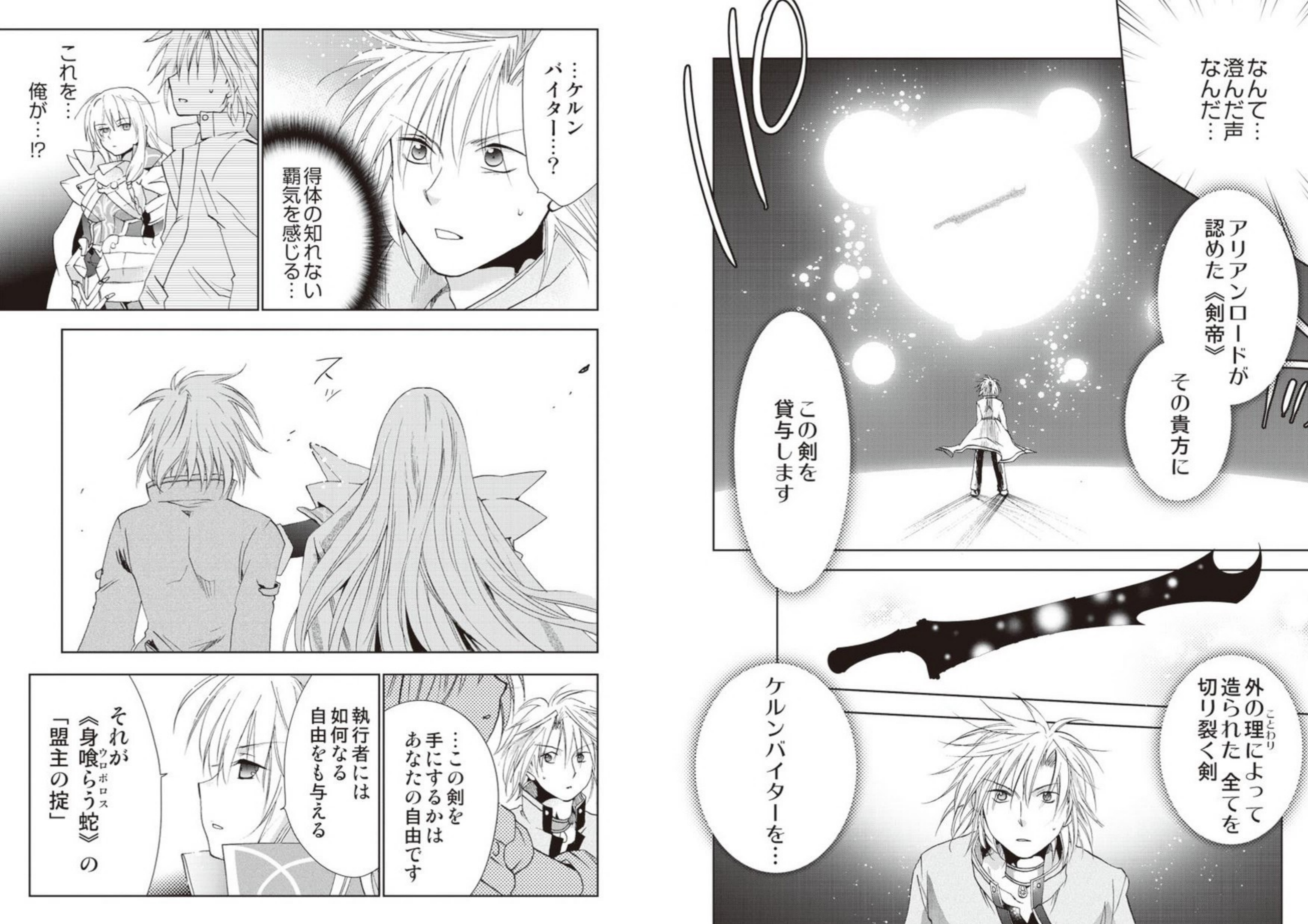

レンやヨシュアが何故あの強さでいられる？
あの幼子たちが
それは彼らに迷いがないからだ
犠牲は犠牲と割り切り目的のためなら機械のように命を奪う
それが彼らの正義で存在理由なのだよ
——さて
レオンハルト


君がこの結社にいる意味とは
君にとっての正義とはなんだね？
ぐ…
ザッ
カッ
カッ
カッ


くそッ…
ワイスマンめ…！
わかっている
ヨシュアは執行者だ
結社のために任務を全うするのが仕事だ
それは生きるために俺たちが選んだ道だ！
だが
その前にヨシュアは
カリンの…

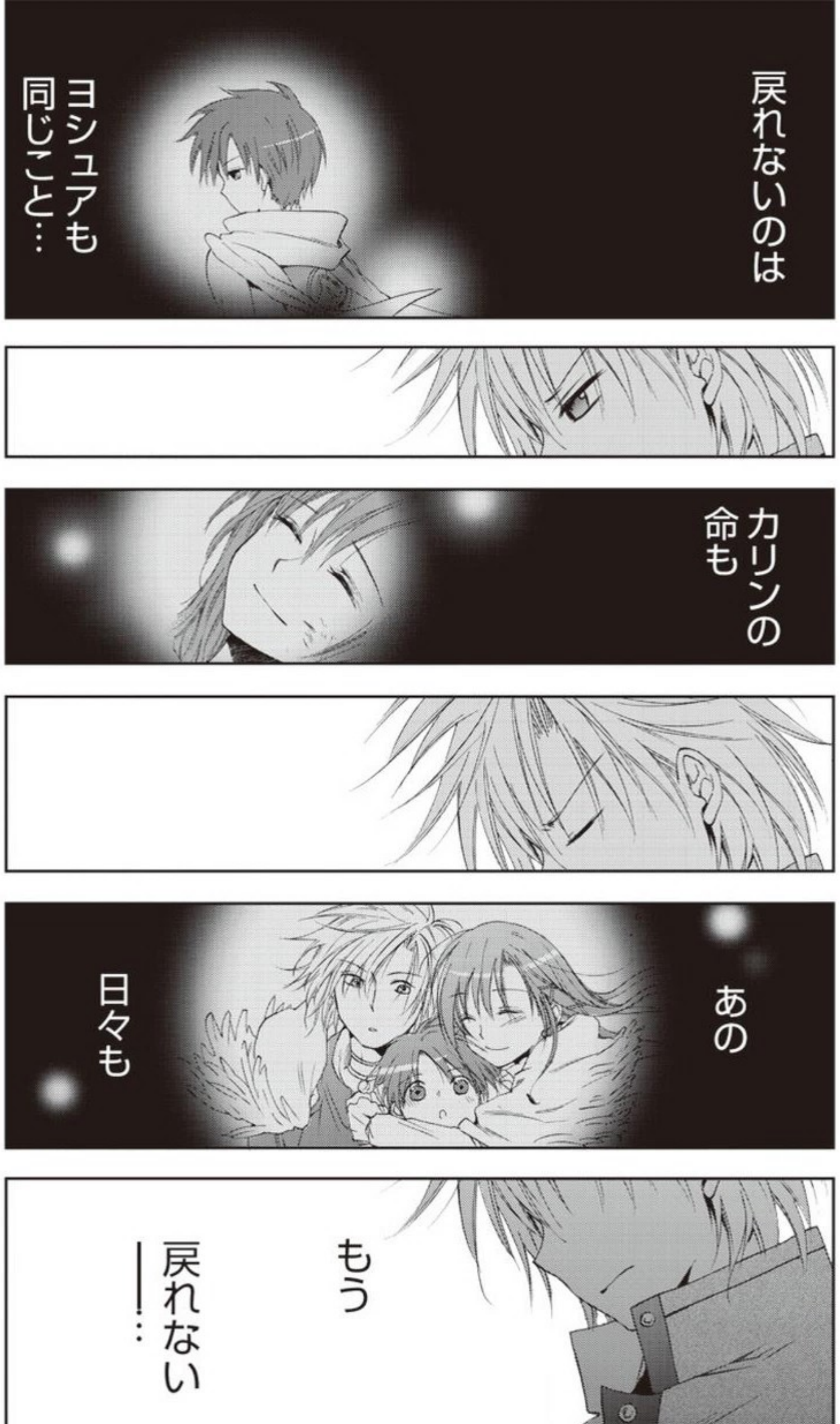
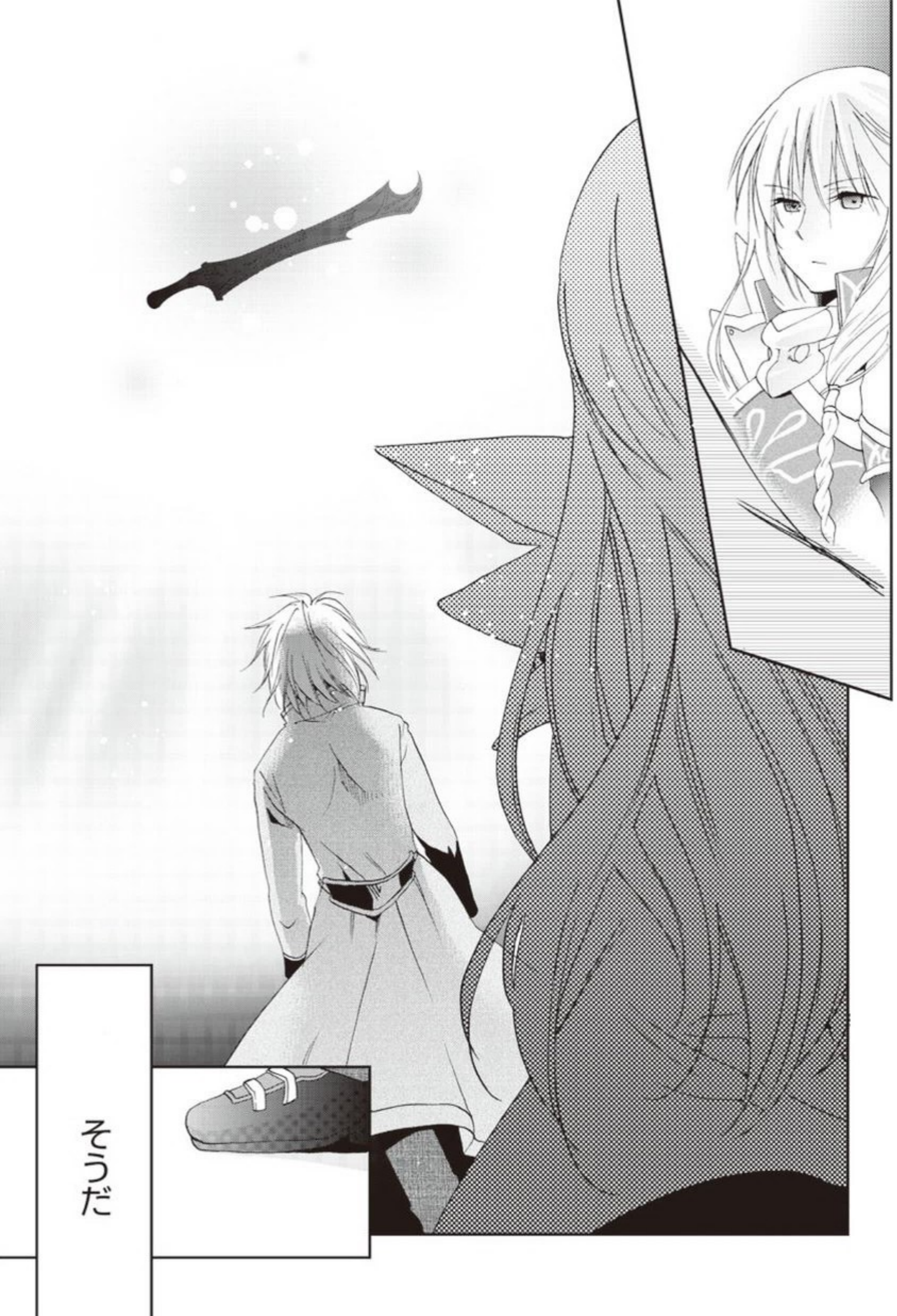

――俺の大切な……!!
――……!
コツ
レオンハルト
……
……使徒
アリアンロード……!
何の用だ
先日は ありがとうございました
……珍しい
貴方らしくない表情ですね


……そんな貴方はすでに死んだものと思っていましたが……
――失礼
替わりの剣が用意できました
同行願えますか
同行？
盟主のもとへ
初めまして
レオンハルト
アリアンロードよりその腕は聞き存じています
…これが盟主の声…

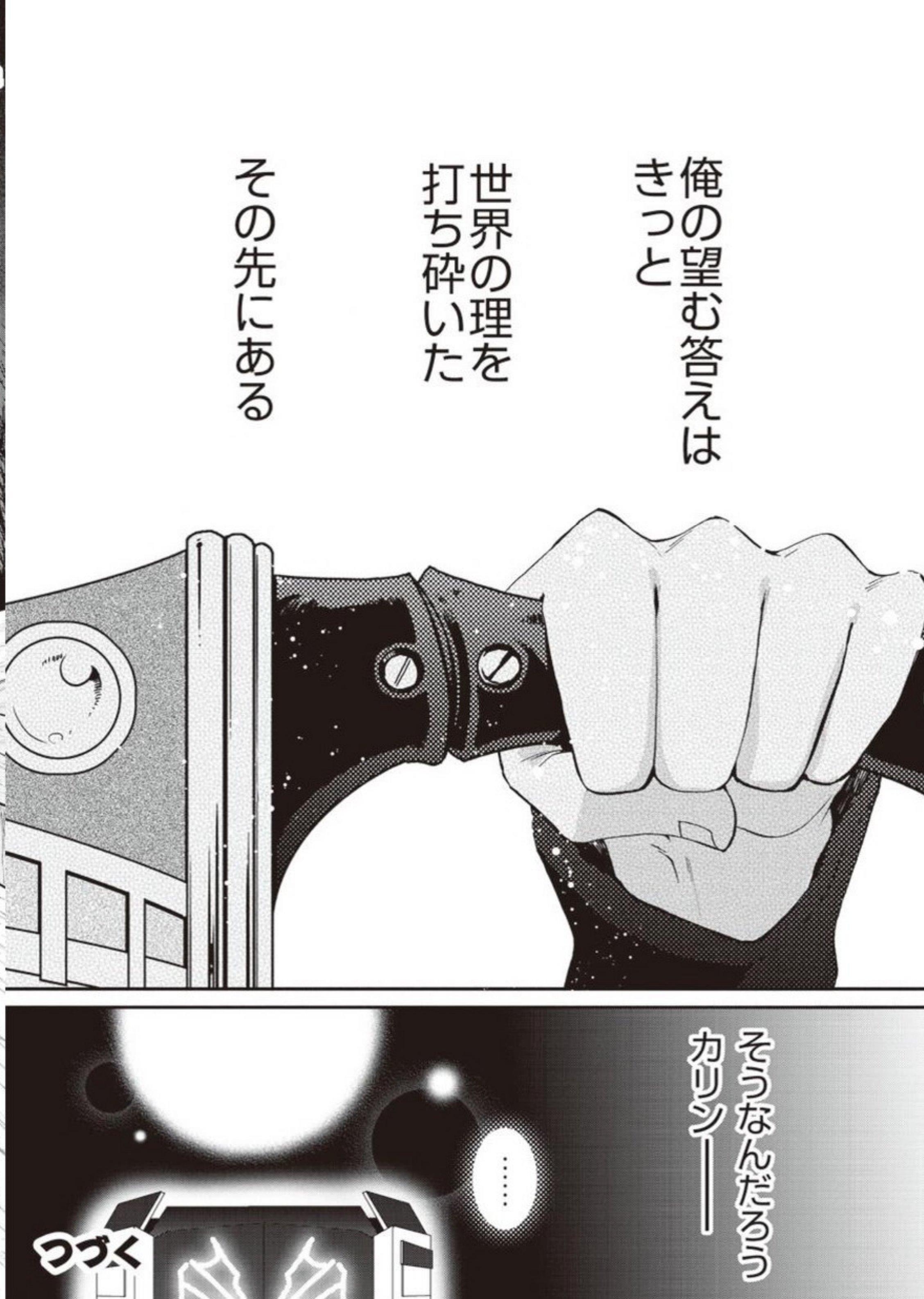

なんて…澄んだ声なんだ…
アリアンロードが認めた《剣帝》
その貴方に
この剣を貸与します
外の理（ことわり）によって造られた全てを切り裂く剣
ケルンバイターを…
…ケルンバイター…？
得体の知れない覇気を感じる…
これを…俺が…!?
スッ
…この剣を手にするかはあなたの自由です
執行者には如何なる自由をも与える
それが《身喰らう蛇（ウロボロス）》の「盟主の掟」


——あの剣は人の身には過ぎたるもの
手にすれば
人を超えた力をも手に入れることができるでしょう
しかし当然
それは己を《修羅》と化して生きるということ
人としての道には戻れない


どうか
後悔のない選択を
「人間には戻れない」…


戻れないのは
ヨシュアも
同じこと…
カリンの
命も
あの
日々も
もう
戻れない
——…

そうだ


戻れないのなら
進むしかない
――ケルンバイター
ありがたく
使わせてもらおう
あの時
戦うことを選んだカリンのように
強く
――ああ
そうか…


俺の望む答えは
きっと
世界の理を
打ち砕いた
その先にある
そうなんだろう
カリン――
……
つづく


『戦国ソーサリアン』 88・98遊んでるけど基本は PC88版で。
剣と魔法のファンタジー世界から日本の戦国時代へ。違和感たっぷりと思いきや
シナリオが連作になり、絵も音楽も和のテイストがふんだんに使われ、
それらがぴったりかみ合っている。ものすごく美しくまとまった「ソーサリアンの
もうひとつの世界」を作り出しています。愛してやまないソーサリアンの中でも
さらにお気に入りの作品です。
………ヌエ以外は(笑)。
啄木鳥しんき
ファルコム大好き!



みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

魔物とランプ



古文書



ウソつき



カルマ



ダルク先生の説得



剣帝は語る



はだかの王子様



小説版 零の軌跡 四つの運命

第六章 抗争の疑惑（後編）

田沢　大典
Illustration 松竜

　支援課が入っているビルの一階は、主に共用スペースとして使われていた。玄関から見てステップフロアとなっている少し小高いフロアには、長机がある。年代物らしく傷は多いが、しっかりとした作りでガタつきひとつない。ここでメンバーは食事を取ったり、他愛もない雑談に花を咲かせたりする。しかし今は、捜査のための重要な会議が行われていた。

　ロイドが、長机の近くに置かれたホワイトボードの前に立っている。ホワイトボードには旧市街の地図が貼られ、今回の事件に関わっているであろう人の名前、その所属などをロイドが手早く書いていた。これから、サーベルバイパーとテスタメンツの抗争に関する事件についての捜査会議を行おうとしているのだ。

　一通り書いたロイドが、長机の方を見る。そこには、エリィ、ティオ、ランディが座っていた。エリィとティオは姿勢よくイスに座っているが、ランディは背もたれに身体を預け、足を組んでいる。みな、ロイドの次の言葉を待っていた。

「発端は五日前の真夜中。『サーベルバイパー』と『テスタメンツ』のメンバーがそれぞれ何者かに襲われた」

　ロイドは事件の概要を説明した。簡潔な言葉で要点をまとめる。警察学校で最初にたたき込まれる、捜査会議での説明方法だ。

「場所は、旧市街の別の二箇所。ここと、ここになる」

　言いながら、ホワイトボードに貼られた地図に赤い×印を付けていく。ペンが走る音がする中、みなロイドの説明を真剣に聞いていた。

　エリィがホワイトボードの地図を指差しながら言う。

「西の裏通り裏の西通りで『テスタメンツ』のメンバーが襲われ……」

　そのまま指を、もうひとつの×印の方へと向かわせる。エリィが言葉を発する前に、ランディが口を開いた。

「で、東のライブハウス前で『サーベルバイパー』のヤツが襲われたってことだな」

　そう言って、背もたれにわずかに身体を預け、イスを揺らす。ティオはじっと地図を見つめていたが、少しだけ目が見開かれる。何かに気づいたようだった。

「……こうして見ると、旧市街の反対側同士ですね」

　ティオの言葉にロイドがうなずく。

「ああ、同じ夜に起きても、すぐには判らなかったはずだ」

　両方の×印を指し示しながら、事件に関する仮説をひとつ積み重ねる。

「ある程度の時間が経ってはじめて、闇討ちがお互いの仕業だと確信して現在に至る、というところかな」

　そこまで言ってからロイドは腕を組み、黙った。みなの意見を聞こうというつもりらしい。

「うーん……やっぱり、第三者がいたとしか思えねえぜ」

　そう発言したのはランディだった。両手を頭の後ろで組み、ホワイトボードを難しい顔でにらみつける。考え事をするときのクセのようだった。

「どっちかのメンバーの全員が口裏を合わせない限り、どっちの犯行も不可能だろう？」

　ランディは、サーベルバイパー、テスタメンツ、両方の犯行の可能性を否定した。今回の事件は、サーベルバイパーかテスタメンツ、どちらかのメンバー全員が結託すれば、『演出』することは可能だ。だが、その場合、自分の仲間を自分たちの手で病院送りにする必要がある。ケンカっ早い彼らが相手を攻撃する時に『仲間がやられた』という大義名分を必要とするとも思えないし、なにより大事な仲間を自分たちの手で痛めつけることをするとは思えないのだ。

「ランディの言うとおりだ。この段階で、ふたつの犯行を第三者の仕業だと仮定してしまっても構わないと思う」

「そうね……少しずつ可能性を絞らないと前に進めないし」

　エリィはあごに手を添えて、ややうつむいたまましゃべった。慎重に考えながら、ランディとロイドの仮定に同意する。そして、顔をあげてロイドの方を見やった。

「――で、その第三者として上がってきた名前があるわけね」

　ああ、と言いながらロイドがうなずく。その表情が一段と引き締まった。いよいよここから、事件の核心に迫っていくところだからだ。

『ルバーチェ商会』――クロスベルの裏社会を支配しているというマフィアだ。グレイスさんの情報によれば半月ほど前、

その構成員が旧市街で目撃されている。この情報自体の真偽を確かめている時間はないけど……まずは『ルバーチェ』が二件の傷害事件を起こしたという仮定で話を進めてみよう」
ロイドは一気に説明をし、みなを見回す。さっきと同じ、意見が出てくるまで待とうというポーズだ。するとティオがぽつりとつぶやいた。
「……そうなると……やはり問題は〝動機〟ですか」
ティオの言葉に、ランディが答える。
「うーん、動機ねぇ……利害の絡みそうにないマフィアと二組の不良集団か……」
そう言って、天井を見上げる。そこに何か良いアイデアが張りついているのか、と思わせるほど、じっと見つめていたが、当然のように答えが貼られているわけではなかった。
考え込むティオとランディを見つめ、エリィが言った。
「それら三つの〝点〟を結ぶ〝線〟があるはず」
この線を見つけることが、今回の事件を解く鍵となる。そう結論づける。
「不良連中もマフィアも、メンツをつぶされれば怒り狂って動く、って線で考えてみたんだが……マフィアに関しちゃ、メンツどころか表だってもねぇ。つながらねぇな」
ランディの言葉に、エリィもうなずく。
「ランディの言うとおりだわ。マフィアは必要がない限りは示威行為には出ず、影に潜み機会を窺うもの。現に、グレイスさんが見た時も、自分たちの正体が分からないように行動していたみたいだし」
そして彼女は、そのまま視線をロイドに移した。
「——ねえロイド、見当は付いているのでしょう?」
えっ、とティオとランディは軽く驚き、ロイドの方を見る。
ロイドは少し照れくさそうに頬をかく。エリィの考えは当たっているようだった。ロイドは、まだ確証があるわけじゃないけど、と前置きをし、表情を引き締めて言った。
「三つの〝点〟を結ぶ〝線〟、俺は《黒月》だと思う」
「あのヒゲ先生が教えてくれた情報だな」
ランディがすかさず補足を入れる。面白くなってきた、と言わんばかりにテーブルに肘をつき、身を乗り出す。
「確かに、可能性としてはいちばんありそうな気がするけど……。でも、そうだとしたら、どんな線になるのかしら」
再びあごに手を添え、エリィが考えつつしゃべる。その眉根は寄せられ、彼女が深く考えているのが外から見ても分かる。
少しの間、一同が無言になる。訪れた静寂があたりを包むと、その時ティオがしゃべり出した。
「点と点を結ぶ線は、どうして結ばれるのでしょう？」
ティオの発言に、誰も返答できなかった。質問の意味が分からなかったらしい。
「導力ネットワークが結ばれるのは、端末からサーバーにアクセスするためです。端末という点と、サーバーという点を、ネットワークという線で結ぶ。それによって、情報を引き出せるようになります」
エリィがあごに手を添えたまま、つぶやいた。
「つまり、情報を引き出すという目的があるから、線をつなぐ……。なら、ルバーチェがサーベルバイパーやテスタメンツとつながる目的を考えればいい、というわけね」
「そのとおりです。目的……もっと大きく『必然性』とでもいいましょうか。黒月が関係することで、ルバーチェと不良グループがつながる『必然性』、それが見えれば、あるいは」
事件解決の糸口が見えるかもしれない。エリィとランディは、うなずいた。
「パッと思いつくのは、黒月が来たことで、手を組もうぜーって話だが……マフィアと不良グループが手を組むなんてこと、まずないんじゃねーか？」
ランディの言葉に、エリィも同意する。
「さっきランディが言ったとおり、マフィアも不良グループもメンツを重要視するわ。共闘する場合は、お互いが同格だと認識しない限り無理よね」
その時、ティオがキョトンとした顔で尋ねた。
「あの……因子の関係性が双方向ではなくて、片方向だけ、ということはありませんか？」
「おいおいティオ、また専門用語か？」
ティオの難しい言い回しに、ランディが悲鳴を上げる。ティオはジト目をランディに向けた。
「……では、ランディさんのためにマスターとスレーブとでも言い換えましょうか」
「……おまえ、わざと分かりにくい言葉選んでないか？」
ランディ、とエリィが茶々をたしなめる。そのまま、ティオに続きを促した。
「ティオちゃん、それって？」
「つまり、両方にではなく、片方が一方的に利益を得られるなら、つながりができるのではないか……ということです」
その時、目を閉じてじっと考えてこんでいたロイドが、急に目を見開いた。そうか、とつぶやき、何度かうなずく。自分で自分の考えを整理し、穴がないことを確認していた。
「なんか閃いたか？」
「『必然性』の話だよ。それから、『一方的な利益』も」
ランディの問いにロイドは答える。
「《黒月》のクロスベル進出を受けて、ルバーチェ側がする事といえば何だ？」
ロイドはみなに問いかけた。問いはとてもシンプルで、み

ながが考えるとっかかりとして分かりやすい。

「そりゃあ、単純に考えれば戦力増強だろ」

最初にランディが答えた。

「兵隊の増強と武装の強化。どちらも欲しいところだよな」

人差し指と親指を出し、数を数えながら話をする。

ロイドは軽くうなずき、ランディの話を受ける形で続ける。

「マフィアなら、武装の強化は密貿易で確保できるだろう。……だが、戦闘員の方はどうだ？」

「そいつは……」

ランディは口を開きかけたが、そのまま押し黙ってしまう。マフィアの戦闘員ともなれば、ただ人を雇えばよいという話ではない。相応の腕前と覚悟が必要になる。

「普通に考えたら猟兵団を雇うところでしょうけど……ううん、駄目ね」

エリィはいったん口にした自分の意見を、自分で否定した。首を振り、あごに手を添えて思考する。

「クロスベルは色々な意味で周辺諸国から注目されすぎている。《不戦条約》の手前もあるし、猟兵団なんかを動かしたりしたら帝国と共和国が黙っていないわ。それは両者の意を受ける政治家や議員たちにも同じこと……」

クロスベルという土地を内外から見つめ続けてきたエリィの分析は的確で、ロイドは聞きながらうなずいていた。

「つまり、ある程度の実力があり、帝国も共和国も外交問題にしない、あるいはできないような人間が理想、ということですね」

「しかも、ひとりふたりじゃダメだぜ。マフィアが戦闘員として必要とするなら、ダース単位は欲しいところだろう」

ティオのまとめに、戦闘のプロであるランディが補足をする。

「でも、そんな都合のいい人間を、しかもまとめてだなんて……」

エリィのつぶやきは、途中で消えてしまう。そして、彼女の顔には驚愕の表情が浮かんでいた。

「――あ」

ティオとランディも気づいたようだ。ティオもまた驚きで目を見張り、ランディはイスから腰を浮かせた。

「ロイドさん、もしかして……」

「その兵隊候補として、不良どもをってことかよ!?」

ランディの大きな声がフロアに響く。ランディは、ロイドに確認を求めるように見つめた。

「ああ……血の気が多く、しかも統率されている青年たち。この街で運用できる戦力としてはまさにうってつけだろう」

ロイドはランディたちの推測を肯定し、話を続ける。

「しかし、どちらのグループにも目障りな存在がいるとしたら……？」

「なるほど……あのワジ君は、間違ってもマフィアに協力しそうにないし」

「あのヴァルドさんもお山の大将でいたいタイプ……とてもマフィアの下で働きそうにはありませんね」

「そこで、お互いを潰し合わせて弱体化させた頃合いを見計らって、一気に取り込みにかかる……なるほど、そういう筋書きかよ！」

ロイドの言葉を受け、エリィとティオとランディが発言する。そのテンポは小気味よく、まるで何かの演奏のようだった。

「あくまで可能性のひとつさ。現時点である情報をひとつずつ組み立てた場合のね」

盛り上がる三人を前にし、ロイドがさらりと言う。一度冷静になり、自分たちが視野狭窄に陥ってないかを確認するかのようだった。

しかしランディはすっかり盛り上がり、ロイドの元へ歩いていって、その肩を勢いよく叩いた。

「またまた～！　謙遜するなってーの！」

痛いってば、と言うロイド。しかしその表情は笑顔だ。

エリィもまた、ロイドに負けないほどの笑顔だ。

「うん、私もかなり的を射ていると思うわ。推理にも無理がないし、状況的な説得力もあるもの」

「……伊達に捜査官の資格を持ってはいませんね」

そう言って目を閉じ、ティオが微笑む。

三人から褒められ、ロイドは頭をかいた。少々照れくささを感じていたようだ。

「はは……ありがとう。――それで、さ」

ロイドの次の言葉に、みなが意識を傾ける。

「この推理……あのふたりにも伝えた方がいいと思わないか？」

エリィたちは、またも驚きの表情になる。

「あのふたりって……」

「おいおい、まさか……」

ロイドは、ホワイトボードに書かれた文字を指差しながら言った。

「ヴァルド・ヴァレスに、ワジ・ヘミスフィア。『サーベルバイパー』と『テスタメンツ』のヘッドたちさ」

駅前通りは夜になると、人影もまばらになる。夜の闇に浮かぶ巨大なクロスベル駅は不気味な迫力があり、用事もなくここを訪れる者はほとんどいない。

共和国方面行きの最終列車がけたたましい音を立てて出発すると、あたりは静寂に包まれた。

　ロイドたちは人気がいなくなる頃を見計らい、ワジとヴァルドをここ駅前通りの奥にある、資材置き場に呼び出した。ここなら、人目につくことはまずありえない。警察官と街の不良グループのヘッドが密会するには、うってつけの場所というわけだ。

　支援課のメンバーが駅前に到着する直前、何者かの怒号が響き渡った。

　まっさきにランディが反応する。

「おい、今の声は……」

「……サーベルバイパーのヘッドの人だと思います」

　即座にセンサーモードに切り替えたティオが答える。ロイドは足を速めながら、みんなに言った。

「急いだ方が良さそうだ」

　ロイドの声に従うように、エリィたちもスピードを速める。

　彼らが駅前通りから横にそれる階段を駆け下り、資材置き場に到着した時には、すでにヴァルドとワジは到着していた。ヴァルドは背中に木刀を担ぎ、ワジに噛みつかんばかりの勢いで迫り、ワジはようやく到着したロイドたちを半笑いの表情で眺めている。一触即発、という雰囲気だった。

「てめえら……」

　ヴァルドのイラついた声をさらりと受け流し、ロイドが詫びる。

「済まない、ふたりとも。待たせてしまったみたいだな」

　ワジはロイドの方に向き直り、うやうやしく一礼をする。右手を胸の前に添え、まるで役者のようだ。

「お招きにあずかり光栄至極――」

　そこまで言って、顔を上げてニヤリと笑う。

「約束どおり、さぞ面白い話を聞かせてくれるんだろうね？」

　その笑顔に街灯が作り出した影が顔にかかり、凄味のある雰囲気を生み出していた。

「面白いかどうかはともかく、興味深い話ではあると思う。さっそく聞いてくれるか？」

　ロイドは手早く説明を始めることにした。ワジは何故ここに呼ばれたか、既に理解しているようだったからだ。

　しかし、ヴァルドは事情が飲み込めない様子で、話にブレーキをかける。

「ちょ、ちょっと待ちやがれ。面白い話だぁ？　いったい何を言ってやがる!?」

　驚きつつも、精一杯すごんでみせるヴァルドの努力をあざ笑うかのように、ワジがあきれ声をあげた。

「バカだなぁ、君は」

　その言葉に色めきだつヴァルドを完全に無視し、ワジがよ

どみなく話を続ける。

「五日前の夜、旧市街で起こった二件の傷害事件……その真犯人の目星が付いたって話に決まってるじゃないか」

「な、なにぃ……!?」

　ヴァルドが驚きの声をあげるが、同時にエリィたちも驚いていた。

「……あなたの方も、疑っていたようですね？」

　ティオがワジに問いかける。ティオのまなざしは鋭く、自分が相対している相手がいかに油断ならないか、よく分かっているようだった。

　しかしワジは、ティオのまなざしなどまったく感じていない様子で、手をあげてわざとらしくおどけて見せた。

「僕も最初はメンバーの勝手な暴走かと思ってたんだけど……よくよく状況を整理してみると、どう考えても不自然じゃないか。バイパー側にしてもそれは同じ……まぁ、僕の推理はそこで止まっちゃってるけどね」

「そうか……だったら話は早そうだ」

　ワジの言葉を聞きながら、ロイドはワジの洞察力の高さに内心舌を巻いていた。しかし、ここで相手を褒めたところで、こちらにはなんの得にもならない。ここは話を進めるのが得策だった。

　ロイドはヴァルドの方に向き直る。

「――ヴァルド・ヴァレス。色々と不審なことはあるかもしれないけど……まずは一旦、こちらの話を最後まで聞いてくれないか？」

　薄闇の中でも分かるロイドの真摯なまなざしに、ヴァルドはあてられたようだった。肩にかついでいた木刀を下ろし、舌打ちをする。

「――手短に話せ。もし、下らねぇ話だったら、その頭をカチ割ってやるからな」

　どうやら、話は聞いてもらえそうだ、とロイドは内心で少し安堵する。

「それじゃあ早速始めよう。まずこの推理は、旧市街の真反対と言える場所でほぼ同時刻に起きた、という不自然な点から着目したんだが――」

　ロイドはなるべく手短に説明をした。ワジはともかく、ヴァルドは簡潔に話さないと、飽きて帰ってしまうのではないか、と思ったからだ。

　だが、ヴァルドは食い入るようにロイドの話に聞き入っていた。反対にワジの方は、ある程度話を聞いた段階で結論は読めたらしい。ロイドの話に相づちも打たず、何かをじっと考えている様子だった。

「――よって、ルバーチェが今回の事件に関わっていた可能性が非常に高い。これが現時点での情報を組み立ててみた推

理だ。率直な感想を聞かせて欲しい」

　ヴァルドはただ突っ立ったまま、地面を見つめていた。まるでロイドの言葉が耳に届いていないかのようだ。

　代わりにワジが、髪の毛をかき上げつつ、ため息混じりに答える。

「参ったね。まさかマフィアなんかに、そこまでコケされてたとは」

「今の話……納得してくれたのかしら？」

　エリィの問いかけに、ワジは人の悪そうな笑みを浮かべる。

「フフ、納得もなにも……前にルバーチェの遣いが僕たちの所に来てるからね」

　その言葉に、ロイドが驚く。

「良い目を見させてやるからウチの下で働かないかってね。もちろん鼻で笑って追い返してやったけどさ」

「そうだったのか……」

「……決まりだな」

　ランディの言葉に、一同がうなずく。決定的な証拠だった。

　ワジがヴァルドに声をかける。

「君のところはどうだい、ヴァルド？　やっぱりマフィアの勧誘があったんじゃないの？」

　沈黙したままだったヴァルドはワジをギロリとにらむ。

「……ああ、一月くらい前にな。あまりに舐めた話だったから脅しつけて叩き出してやったが……」

　ヴァルドの瞳がカッと見開かれ、口元に獰猛な肉食獣の笑みが浮かんだ。

「……クク、まさかここまで舐めた真似をしてくれるとはなァ……！　ワジ！　てめえとの決着は延期だ！　マフィアだろうと関係ねぇ！　まとめて叩き潰してやらあッ!!」

　ヴァルドの怒号が再びあたりに響き渡る。木刀を背中に背負い、今にでも走り出して、ルバーチェの事務所に突撃しそうな勢いだ。

「ちょ、ちょっと!?」

「沸点低すぎです……」

「お、落ち着いてくれ！　下手にそんな事をしたら――」

　ロイドたちが必死にヴァルドをなだめようとしたその時。

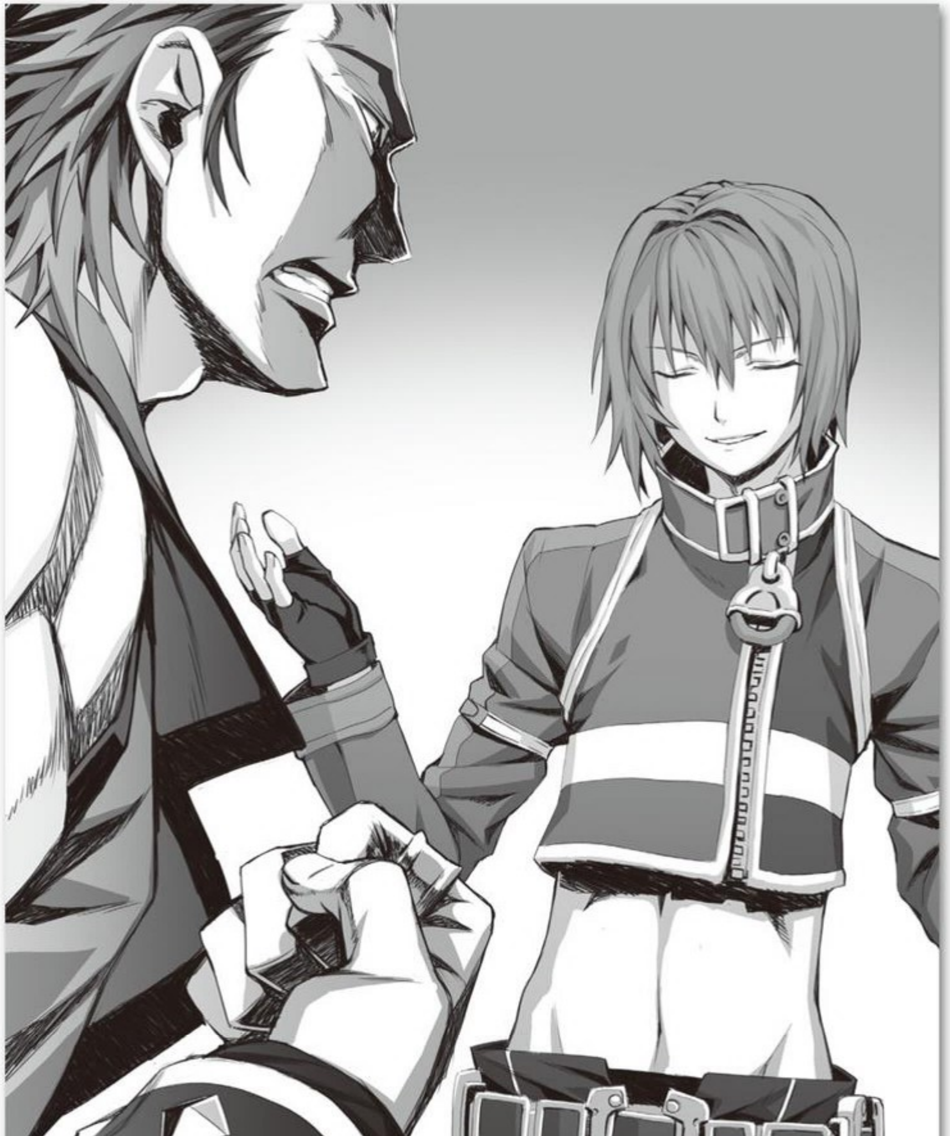
「本当、馬鹿だなぁ」

「なにぃ……!?」

　ワジが冷や水のような言葉を浴びせ、一瞬場が凍りついた。

　目を剥いて怒るヴァルド。普通の人間なら思わずすくみ上がってしまうところだが、ワジはまったく意に介さない。大げさに肩をすくめ、まるで役者のようにまくしたてた。

「マフィア相手にケンカして勝ち目があるわけないだろう？　下手に乗り込んだところで、蜂の巣にされるのがオチだろうね」



「るせえ！　やってみなきゃ判らねえだろうが！」

ワジの冷静な言葉に反発するかのように、どんどんヒートアップしていくヴァルド。その様子をワジは、言葉以上に冷めた目で見つめている。

「あのね、体力バカで、多少導力銃で撃たれたところで死なない君はいいよ」

バカとはなんだ、というヴァルドの怒号を無視してワジは続ける。

「でも――君のかわいい舎弟たちまで、それに巻き込むつもりかい？」

そこで、怒号はピタリと止まった。ぐ、といううめき声をあげたら、あとは黙りこくってしまう。この様子を見て、ロイドたちはワジのあしらい方に舌を巻いていた。ヴァルドを怒らせるのも黙らせるのも、彼の口先ひとつで思うがままなのだ。

「なら、てめえはどうなんだ⁉　ここまでコケにされて……仲間をやられたままで、おめおめと引き下がれんのか⁉」

ヴァルドは怒りの矛先をワジに向ける。同じ不良グループの頭（ヘッド）として、ワジの弱腰の姿勢にガマンがならなかったからだ。

だが、ワジから返ってきたのは、意外な答えだった。

「フッ……そんなワケないだろ」

髪をかき上げ、不敵に微笑む。ヴァルドを含め、ロイドたちも驚いていた。ワジはこのまま問題を穏便に済ませるつもりだと思っていたからだ。

「今回の件、関わってるのはマフィアでもごく一部のはずだ。なら、そいつらにのみ落とし前を付けさせればいい。報復もできないくらい、きっちりとスジを通した上でね」

さっきと同じように、口調は冷静だ。だが、そこには氷のような冷たさと鋭さがあった。ヴァルドの肉食獣のような激しさとは違う、得物を理知的に、確実に仕留める狩人のような恐ろしさをまとっている。

「――ヴァルド。君にも協力してもらうよ。」

ワジはそう言って微笑む。その表情を見て、ヴァルドは、彼とはじめて出会った時のことを思い出していた。

「おまえ……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

このままではまずいことになる。直感的にそう判断したロイドは、ふたりの間に割って入った。

「何をするつもりだ？　あんまり不穏なことは――」

「ああ、心配しなくても、君たちにも手伝ってもらうから」

さらりとんでもないことを言われ、絶句するロイド。ワジは割り込んできたロイドに顔を近づける。

「――君たちの任務は、旧市街での事件を解決すること。だったらマフィアが今後、僕たちに余計な手出しをしないよう言い含めてやる必要がある……違うかい？」

「そ、それは……」

ロイドは思わずたじろいだ。ワジの端正ながら迫力のある顔を目の前にしては、新米捜査官ごときでは太刀打ちできないのは明白だった。

そんなロイドを遠巻きにしつつ、エリィたちは肩を寄せ合ってひそひそと話す。

「どういう事……？」

「……よく判りませんが……」

「なんかロイドのやつ、取って喰われそうだな……」

「ちょ、ちょっとランディ、そういう冗談は止めなさい！」

「……ワジさんなら、やりかねません」

「ティオちゃんまで！」

彼女たちのやりとりを横目で見つつ、ワジはたじろぐロイドに向かってにっこりと微笑んだ。

「あんな面白い推理をわざわざ披露してくれたんだ。責任……取ってくれるよね？」

「せ、責任⁉」

「最後まで付き合ってもらうってことさ」

ロイドは、ワジとヴァルドに話したことを、すでに後悔していた。

それから三日後。

一触即発、という雰囲気だったはずの不良グループたちは特に争うこともなく、旧市街は不自然なほど平穏だった。このことをほとんどの市民は歓迎したが、そうでない者たちも当然のようにいた。

真夜中ともなると、旧市街入口にある広場には人気はまったくない。そこに、闇に紛れるかのように、黒いスーツの男たちが四人、集まってきた。ご丁寧に、黒いサングラスまでかけている。

彼らは広場の中央に集まると、ひそひそと話を始めた。

「チッ……静かなもんだな。あそこまで仕込んだのに、どうして潰し合いが始まらない？」

ひとりの男がイラついたように吐き捨てる。別の男が、気味悪く喉を鳴らして笑った。

「クク……最後の一押しが足りんだけさ。導火線に火が点けば、勝手に潰し合いが始まるだろう」

「バイパーとテスタメンツ、どっちのガキでもいい……目に付いたヤツをやるぞ」

「くれぐれも姿を見られるなよ？　バイパーならスリングショット、テスタメンツなら背後から一撃だ」

残りふたりの男が、まったく感情を込めずに淡々と話す。

彼ら少年たちを人間扱いせず、兎や狐のように考えている。声の調子から、それが伝わってきた。そして、それを証明するかのように、喉を気味悪くならした男がつぶやく。

「クク……狩りの始まりだ」

彼らにとってこれは人間を襲うのではなく、哀れな動物を仕留める狩りのようなものだったらしい。

男たちはその言葉を合図にめいめいに散らばり、旧市街の暗い路地の中へと消えていった。

それから数十分後。

テスタメンツの根城である店『トリニティ』からほど近い裏通り。そこを、青装束を着たひとりのテスタメンツメンバーが歩いていた。フードを目深にかぶり、ひたすら前を見て進む。

しばらく歩くと、少し開けた場所に出た。倉庫の物などを一時的に置いておく荷物置き場だ。

フードをかぶった人物が荷物置き場を歩いて抜けようとする。と、その背後に先程の黒いスーツの男のひとりが現れる。その手にはサーベルバイパーのメンバーが持つ、釘つきのこん棒が握られていた。

男は大きくこん棒を振りかぶるが、フードをかぶった人物は前だけを向いているので気がつかない。そのまま男は、脳天にこん棒を振り下ろした。

「がっ！」

悲鳴にもならない悲鳴を最後に、ばったりとうつぶせに地面に倒れる。動かなくなったことを確認するスーツの男。

「クク……青ウサギを一匹と」

どうやら、先程の気味悪く喉を鳴らす男だったようだ。男があたりに目配せをすると、荷物の影から、他の三人の男たちも現れた。

「ハハ……あっさり掛かってくれたな」

「時間はない……とっとと痛めつけるぞ」

「ただし、殺さない程度にな」

得物を前にして舌なめずりをする男たち。まさに『狩り』そのものだった。逆に、狩られることになるとも知らずに。

「クク……悪く思うなよ」

男がそう言いながら釘つきこん棒を振りかざし、倒れている相手に振り下ろしたその時。

「──そうは行くか！」

あたりにロイドの凛とした声が響き渡った。

男の振り下ろしたこん棒を隠し持っていたトンファーで受け止め、そのまま身体を捻り、男の手からこん棒を振り落とす。男はのけぞりながら後ろに二、三歩下がり、間合いを取った。

ロイドはかぶっていたフードを跳ね上げる。その頭は、頑丈なヘルメットで守られていた。

「……まったく。まさかここまで見事に引っかかってくれるとはね」

黒いスーツの男たちが色めき立つ。

「ヘルメットだと……⁉」

「な、何者だ⁉」

ロイドはヘルメットと、テスタメンツの青装束を脱ぎ捨てた。特務支援課の制服があらわになる。

「現行犯逮捕と行きたいところだけど……微妙に囮捜査くさいし、今回は無理か」

ロイドの制服を見て、黒いスーツの男たちは、ようやく自分たちが罠にかかったことを理解したようだった。

「こいつ、まさか……」

「警察の人間か⁉」

「フフ……彼はあくまで助っ人さ」

自分たちの頭上から声がして、男たちが見上げる。二階建ての建物の屋根の上に、ワジ、エリィ、ランディ、ティオが立っていた。ワジなどは腰に手を当てるポーズまで取っている。すっかり役者の気分らしい。

「おーおー、本当にひっかかるとはなぁ」

「……なかなかの読みですね」

ワジと共に悠長に構えているランディとティオ。一方、エリィはロイドの身を案じていた。

「ロイド、大丈夫⁉」

「ああ……無傷だよ。かなりの使い手みたいだけど、油断してて助かった」

ロイドのこの作戦には、ひとつの賭があった。相手は相当の使い手であり、そして使い手が夜闇に乗じて襲い掛かってくるとするなら、確実に脳天を狙ってくるであろう、と読んだのだ。だからこそロイドは、他の部位に関しては防具を着けず、ヘルメットだけをかぶることにした。そしてその読みは、見事当たったというわけだ。

「まさか俺たちの存在を嗅ぎつけられていたとは……」

男のひとりが、忌々しそうにつぶやく。彼らの苦々しい表情を見て、ワジは満足そうな笑みを浮かべた。

「さてと……どうする、お兄さんたち？　この場で投降するなら大目に見てもいいけど」

そこでいったん言葉を切り、氷のような冷たさで言い放つ。

「──それとも今度は、アンタたちが狩られてみる？」

チッ、と男のひとりが舌打ちをする。

「二手に分かれるぞ！」

別の男の一声で、男たちがふたりずつ一組となり、脱兎のごとく駆けだした。

「ま、待て！」

ロイドは完全に不意を突かれ、声をかけることしかできない。そんな彼の前方に、ワジがスッと降り立つ。その仕草があまりに軽やかで、建物の屋上から飛び降りてきたことを忘れてしまう。

「――ふたり、ついてきて」

ロイドの方を振り向かずにそう言い、そのまま逃げた片方の組を追いかける。ロイドが声をかけようとした時には、ワジはすでに暗闇の中に姿を消していた。

「くっ……！」

何から何まで相手とワジのペースだ、とロイドは焦る。

「ロイド、どうするの⁉」

頭上からの声に見上げると、屋上から心配そうに見守るエリィの姿があった。その隣には、ランディとティオも並んでいる。

焦っている暇はない。今はあの男たちを、なんとしてでも捕まえる時だ。ロイドは瞬時に頭を切り換え、最適なチーム分けを考える。

「エリィ、俺と一緒に来てくれ！　ランディとティオは、ワジと一緒に！」

「わかったわ！」

「がってん承知の助！」

「了解です」

返事と共に、エリィが屋根から下に降りるために建物の裏手に回り込む。ランディは膝をつき、ティオを抱えるような仕草をした。

「ほれ、ティオすけ」

一瞬どうしたものか、と躊躇したティオだったが、今は少しの間も惜しいと判断したのだろう。

「……はい」

素直にランディに抱きかかえられた。いわゆる、お姫様だっこ、というやつだ。

そのままランディは屋根の上からジャンプし、ロイドの近くに着地する。

「このまま走ってくか？」

「……いえ、自分で走れますので」

幾分かむすっとした表情のティオ。子供扱いされたと思ったのだろう。ランディが丁重に地面に降ろすと、そのままワジを追って駆けだしていってしまった。

ランディはロイドに向かって、無言で肩をすくめる。

「おまえらも気をつけろよ！」

そう言って、ランディはティオの後を追って駆けだした。

「ロイド！」

その声に振り返る。ふわり、とパールグレイの髪が夜の闇

に輝く。エリィがやってきたのだ。

「よし行こう、急げばまだ間に合う！」

ロイドはエリィと共に、もう一組の男たちを追いかけるため、駆けだしていった。

ワジの後を追いかけていったランディとティオは、路地裏を駆け抜ける黒いスーツの男たちの後ろ姿を捉えた。しかし、ワジの姿は見当たらない。

「やっこさん、どこいきやがった？」

「分かりません……！」

走りながらも普通に会話できるランディに比べ、走るので精一杯なティオは返事をするのがやっとだ。

このままだと巻かれる、と判断したランディは、先手を打って捕らえるべきだ、と瞬時に判断する。幸い、ここは裏路地でもそこそこの道幅がある。

「ティオすけ、合図で一発なんかぶちかましてくれ」

「はぁ、はぁ……！」

必死に走りつつ、杖を掲げる。いける、というサインだ。

ランディはその様子を見て、こいつ、結構根性あるんだよなぁ、などとどうでもいいことを考えていた。

「三、二、一……GO！」

「はあっ！」

走る速度を緩めながら、ティオが魔導杖（オーバルスタッフ）を振るう。その杖の先から、電撃がほとばしり、十数セルジュ先の男たちに向かって飛んでいく。

それと同時に、ランディは全身のバネを使い、大きく跳躍した。

黒いスーツの男ふたりは、まるでタイミングを合わせたかのように左右に分かれ、弧を描くように反転する。分かれたふたりの間を、ティオが放った電撃が通り過ぎていった。男たちの視線の先にあるのは、電撃を放って完全に無防備になったティオだ。

「マヌケがぁ！」

そう言ってティオに襲いかかろうとした男の頭上に、今度はランディが襲いかかる。あらかじめ跳躍していたのは、このためだったのだ。

「おうら……よっ！」

ランディのスタンハルバードが振り下ろされ、男の背中を一撃する。

「ぎゃっ！」

無防備な背中に衝撃を受け、男のひとりがそのまま地面につっぷした。

ランディは振り下ろした勢いで空中で一回転し、そのまま地面に着地する。しゃがみ込んだ体勢から立ち上がりつつ身

体を反転させ、もうひとりの男に狙いを定める。

そのもうひとりの男は、ティオに向かって銃を構えようとしていた。

「間に合えっ……！」

ランディが全力で駆けだすが、男が銃を出す方がわずかに早い。

ティオに向かって銃口が向けられたその瞬間。

「――キミの相手は、僕」

頭上から声がしたかと思うと、ワジが緑色の光をまとい、男に突撃した。男は銃を放り出して吹っ飛び、建物の壁に打ちつけられる。

「うひょー、魔法(アーツ)を直撃させるとはえげつねーな」

軽口を叩くランディだが、その目は笑ってはいなかった。今の動きひとつとっても、あきらかに素人の動きではない。隠そうとしても隠しきれない、戦いになれた者の空気をまとっていた。しかし当のワジは、ランディの鋭い眼光などどこ吹く風といった様子だ。

「フフ……ブラフの一撃からの攻撃、しかも頭上からなんていう攻撃をかましているキミに言われたくはないね」

ランディに向かってワジが微笑む。ランディが取った攻撃方法は、相手が確実に反撃してくる、と判っているからこそのものだった。相手が逃げることに専念するような相手なら、とっくに逃げ切られていた。しかし、相手はプロである。隙を見せれば、確実に反撃してくるとランディには判っていたのだ。

しかもその方法は、平面に動く相手に対して、頭上からの攻撃という三次元軌道である。確実に相手を仕留めるための戦法だ。当然、猟兵団で培った戦法のひとつである。

「それにしても、女性を囮に使う戦法を取るなんてね」

「んまぁ～、ティオすけならなんとかすんだろ、って思ってたしな」

そう言ってふたりはティオを見る。ようやく息を整えたティオが、いつものジト目でランディをにらみつけた。

「……なるほど。それでは今度からランディさんがピンチになっても『なんとかすんだろ』と思うことにします。一切助けません」

「ちょ、待てよ！　そういうことじゃ……」

「あはははっ！」

ワジの笑い声が、旧市街の裏路地に響いた。

もう一組の男たちは、旧市街入口にある広場まで逃げてきていた。暗闇に包まれたあたりを警戒しながら、来るはずのないもう一組を待っている。

「クソ、まさか腰抜けの警察が出張ってきてるとはな……。

こうなったらいったん戻って応援を――」

そこまで口にし、もうひとりの男があわててまくしたてる。

「ま、待て！　こんな失態、若頭にでも知られちまったら……！」

今回の一件は、どうやら彼らの独断だったらしい。助けを頼めない事情があるようだった。そのことを思い出し、チッと舌打ちをする。

「まあいい、とにかく俺たちだけでも先に――」

「先に、どこに行くんだァ？」

どう猛な声がして、男たちがそちらを向く。暗闇の中から、赤い獣がぬっと現れたように男たちには見えた。それは、愛用の木刀を背中に背負った、ヴァルドの姿だった。

「なっ⁉」

反射的に男たちは逃げようとする。ちょうどそこに、ロイドとエリィが駆けつけた。

「……ここまでだ」

数セルジュの間を開け、ロイドたちと男たちが対峙する。男たちの背後では、ヴァルドがニタニタと笑い、事の成り行きを見守っている。

旧市街でも屈指の不良グループの頭(ヘッド)と、腰抜けの警察官。彼らがどちらと戦うかは、明白だった。

わずかな沈黙の後、男たちは同時に動いた。ひとりが懐に手を入れ、銃を取り出そうとする。その時、一発の銃声が響いた。エリィの早撃ちが、男が手にしていた銃をはじき飛ばしたのだ。

「ちいっ！」

もうひとりの男はそれを認識し、銃を撃って無防備になったエリィに狙いを定める。得物の釘つきこん棒を持ち、ダッシュで一気に間合いを詰めようとしたところに、トンファーを持ったロイドが立ちはだかる。

「らあっ！」

ダッシュの勢いを乗せたこん棒が、ロイドの頭上に振り下ろされる。それを、両手のトンファーで受け止めた。金属がこすれ合う耳障りな音に、男とロイドの荒い息が混じる。

「この……っ！」

なよなよとした優男を一撃で吹き飛ばし、女の方に突撃する、という計画が見事に崩された男は、歯ぎしりをする。しかし、こうして組み合っている以上は、向こうも手出しはできない。男がそう思った時だった。

ロイドが左手をスッと下げつつ手首を捻る。と、男が突然悲鳴を上げた。

「ぎゃっ！」

男がこん棒を落とす。その隙を逃さず、ロイドは右手のトンファーで男の腹に一撃を加えた。こん棒と仲良く並ぶよう

な形で、どさりと男が倒れる。

あまりの早業にあっけにとられるエリィ。早撃ちで動体視力には自信があったが、ロイドが何をしたのか、よく判らなかったのだ。

うずくまる男にロープをかけているロイドの元に、ヴァルドが近づいてくる。

「ヘッ……そんな隠し球があるとはなァ。ヘンな形をしてやがると思ったら、そういうことかよ」

「どういうこと？」

どうやらさっきのロイドの不自然な動きのことを言っているようだった。もうひとりの男にもロープをかけ終わったロイドが、エリィに説明をする。

「このトンファーは、短い方で突くのがメインの使い方なんだけど……」

そう言いながら、エリィによく見えるようにトンファーをかかげる。

「持ち手を回転させることで、相手に不意打ちを食らわすことができるんだ」

ロイドがトンファーを構えた体勢のまま、手首を軽く捻る。と、トンファーが持ち手の部分を起点に回転し、弧を描いた。トンファーが風を切る音は鋭く、まるで短い鞭がしなるような動きだ。さっき男がこん棒を落としたのは、この動きで右手を強打されたからだったのだ。

「なんでそんなにリーチの短い得物を使ってやがるんだと思ったが……クック、とんだ喰わせモンじゃねぇか！」

ヴァルドは心の底から愉快そうに笑った。その目はギラギラと輝き、闘争本能の火がついていることが一目で分かる。

「オイ、もう一度オレとやれ。この前のタイマンじゃ、今の技は使わなかったしなァ……！」

「言っておくが、もうアンタと戦うつもりはない」

好戦的なヴァルドを言葉でいさめつつ、トンファーを腰に吊す。ヴァルドはそれを見て、チッと舌打ちをした。

ロイドが見せた技は、相手を騙し、不意を突くための技である。その手の内がバレてしまった相手には、なかなか通用しにくい。もちろん、この技があることを知っている相手は警戒し、その動きに制約が出る。それを活かした戦い方もできるのだが、そのことはヴァルドには黙っていた。

ロイドの技に目を見開いていたエリィだが、何かを思いついたようだった。

「ねぇ、ロイド。ひょっとして、テスタメンツの格好をして囮をするっていうのも……」

「あぁ、そうだよ。よく分かったな、エリィ」

今度はロイドが驚く番だった。相手が思いもしない行動をし、不意をつく。戦闘術としてトンファーを学ぶ中で、自然と身についた考え方を応用したのが今回の作戦だったのだ。だが、それを今の説明だけで結びつける、というあたりに、エリィの非凡な才能が垣間見えた。

「でも、囮役なんて危険よ。こっちは気が気じゃなかったわ」

「ご、ごめん……」

エリィのたしなめるような声色に、思わず反射的に謝ってしまうロイド。どうやら、女性のこういう言動には逆らえないらしい。

「でも、囮なんて役目、他の誰かにやらせる訳にもいかないし」

ワジからこの作戦の提案があった時、まっさきに囮役に手を上げたのはロイドである。『リーダーが率先して危険な役回りをするべきではない』というエリィたちの反対意見も、『大丈夫だから』のひと言で押し切ってしまった。

「フフ……そんなお人好しじゃ、この先大変だと思うけどねぇ」

突然したワジの声に、ロイドたちが振り返る。ワジは、両肩にのびている男を抱えているランディと、ティオを引き連れて広場にやってきた。ロイドがロープをかけた男たちの横に、ランディが抱えていた男を転がし、パンパンと手を払う。

「ワジ、それにふたりとも、無事だったのか」

「心配してくれたのかい？　うれしいなぁ」

そう言いつつ、ロイドに異様に接近するワジ。エリィはギョッとした顔になり、ティオは自然とジト目になる。

「ワ、ワジ!?」

「フフ……優しいね。キミみたいなタイプ……個人的には嫌いじゃないかな」

ロイドが、声にならない声をあげる。ワジは不敵に微笑み、ロイドを至近距離で見つめていた。

エリィの横に並んだティオとランディが囁きあう。

「おい、やっぱり取って喰われるんじゃねーか？」

「そ、そんな！　だって相手は男の子よ!?……とっても美形だけど……」

「ロイドさん……来るもの拒まず、ですね」

一気に緩んだ空気を吹き飛ばすかのように、ヴァルドが吠える。

「おい！　で、こいつらどうすんだよ!?」

「そ、そうだった！」

その声で我に返ったロイドはワジの側をそそくさと離れ、のびている男たちの元へとかけよった。へたり込んだ男のひとりが、うめき声をあげながらロイドをにらみつけた。

翌日。

ロイドたちは朝食後、支援課ビルの一室にある課長室に集まっていた。セルゲイはロイドたちの報告を、デスク越しに聞いていた。

「男たちが持っている銃器は帝国製の最新式軍用拳銃でした。これはルバーチェの密貿易で扱っている武器だと思われます。彼らは、自身のバックボーンをちらつかせながら恐喝めいた言動を繰り返していました」

「だろうな。で、どうやって説得して、今後手出し無用とお引き取り願ったんだ？」

「それは……」

それまでよどみなく報告をしていたロイドが、言いにくそうに言葉を途切れさせる。その様子に、セルゲイがいぶかしげな表情を浮かべた。

「……グレイスさんです」

ロイドの代わりに、ティオが発言する。

「グレイス？　あぁ、あのクロスベルタイムズの記者がどうかしたのか？」

「はい、あの……クロスベルタイムズに、今回の一件の顛末を書くと」

ロイドの声の張りがどんどんなくなっていく。

「ペンは銃よりも強し、ってところか？　しかし、それで黙るルバーチェでもないだろう。奴らなら、圧力をかけて雑誌を出せないなんて芸当も可能だ」

「はい、似たようなことを言っていました」

「……トドメはなんだったんだ？」

セルゲイの確信をついた言葉に、ロイドは観念して口を開いた。

「……遊撃士の介入があるかもしれない、というグレイスさんのひと言です」

セルゲイは無言のまま、ロイドを見つめる。エリィが補足するように続けた。

「実は今回の件、遊撃士のアリオス・マクレイン氏も介入するつもりだったそうなんです。ですが、多忙であることと、私たちが先に介入していることを理由に今回は譲る、と……」

「まぁ、また手のひらの上ってか？」

「ちょっと、ランディ」

ランディのおちゃらけた調子を、エリィがたしなめる。

「クク──ふははは っ！」

突然セルゲイが笑い出し、ロイドたちは驚いて見つめる。肩を小刻みに揺らしながら、セルゲイが愉快そうに言った。

「なるほど、アリオス・マクレインの名前を出して丸く収まったと。そいつは報告しづらいだろうな」

「すみません……」

ロイドはますます小さくなって、セルゲイに頭を下げる。

「何も謝ることはねぇよ。──それとも、自分たちだけで解決できなかったことが、そんなに不満か？」

セルゲイの言葉にドキリとする。それと同じ事を、グレイスにも言われたからだ。彼女は立ち去る間際、こんな言葉を残していったのだ。

『ふふ、自分たちだけで解決できた気になれない……そんな気分ってところかしら？』

『小さい、小さいわねぇ。必要とあらば、ためらわずに他人の力も借りてより大きな真実を掴み取る……それができてこそ、一人前の捜査官じゃないの？　──あなたのお兄さんみたいな』

またも、兄の名前が出てきた。その背中は大きく、ロイドはまたも自分の無力さを思い知った。誰にも気づかれぬよう、そっと拳を握りしめる。

「しかし、だ。そのグレイスって記者は、相当やり手だな」

セルゲイは、あえてのんきなトーンで話し始めた。彼なりの思いやりなのだろうか。

「はい……彼女の持つ情報網は、かなりのものだと、今回情報交換などを通じて思いました」

「そうじゃねぇよ」

ロイドのきょとんとした顔を見て、セルゲイがあきれたように言う。

「アリオスが本当に今回の事件に関わろうとしてたって、誰か確認したのか？」

「それは……」

セルゲイの言葉に、ロイドたち一同がぽかんと口を開ける。

「つまり……すべてグレイスさんの虚言だったと？」

「そこまでは分からん。本当にアリオスが関わろうとしてたのかもしれないし、嘘かもしれん。だが、重要なのは、実際にルバーチェの動きを封じた、ってことだ」

エリィが頬に手をあて、考えながらつぶやく。

「もし虚言だったとしても、後日アリオスさんと会った時に話をすればいいわけよね。『介入しようとしていたことにしてください』って。そうすれば万事解決する……」

「とんだペテンですね……」

「けど、そういうハッタリも案外重要なんじゃねーの？」

腕組みしながらニヤリと笑うランディ。その言葉に、セルゲイもうなずく。

「おまえらにも、正攻法だけじゃうまくいかないってのはよく分かっただろう。ま、今回の一件、いろいろあったが……新人にしちゃあ頑張ったほうじゃねえか？」

「はい……」
がっくり肩を落としているロイドに、エリィたちが声をかける。
「そんなに落ちこまないで、ロイド」
「新人だけで事件が解決できただけでも上出来なんじゃねーの？」
「はい……胸を張っても、よいのではないかと」
みんなに励まされながら、仲間にこれだけ気を遣わせてしまうリーダーってどうなんだろう、とロイドは思った。
「しかし、今回の一件でおまえらにも見えてきただろ。このクロスベルって場所のやっかいな側面が」
セルゲイのトゲのある言葉に、ロイドが顔を上げる。それは、と言い、そのまま口ごもってしまった。
「まあ、確かにちょいと面倒くさい場所みたいだな」
「さまざまな暗部やしがらみ……大人の事情の温床って感じです」
余所者であるランディは客観的に、ティオは幾分かの嫌悪感をこめて感想を述べる。
「……そうね」
ふたりの言葉を受けて、エリィが深刻そうにうなずく。この街で生まれ育ち、両親も祖父も政治家である彼女からすれば、彼らの言葉にはうなずかざるを得ず、また反論できないもどかしさがあった。
セルゲイはタバコに火をつけてふかした。紫煙があたりに漂う。
「警察本部の連中だって決して無能ってわけじゃない。賄賂を受け取ってるようなバカ野郎もいるみたいだが……多くの捜査官は、そこそこ優秀で自分なりの正義感を持ってる連中だ」
そこまで言うとセルゲイはタバコを手にしたまま立ち上がり、デスクを回ってロイドたちのほうへと歩いてきた。
「だが……有形無形の『壁』がある。マフィアの利権とつながっている議員や政治家どもとかな」
その言葉に、エリィたちは黙り込んでしまう。今回の事件は、まさにそのマフィアと対峙したのだ。この街の『壁』に直接ぶち当たったと言ってもいい。
セルゲイはもう一度タバコをふかし、ロイドに尋ねた。
「どうだ、ロイド？　警察辞めて遊撃士にでも転職したくなってきたか？」
その顔はシニカルな笑みをたたえていた。
「……いえ。そんな事情があっての『特務支援課』でしょう？」
ロイドはそう言って、まっすぐセルゲイを見つめ返した。その瞳はまっすぐで、顔には強い決意が表れている。セルゲイの表情とは、正反対のものだった。

面白いものを見た、といった風に、セルゲイの表情が軽い驚きに変わる。
「ほう……」
「『人を守る』――遊撃士の理念は確かにすばらしいと思います。ですが、それだけじゃ解決できない問題も当然あります。密貿易に違法な武器取引。盗品売買にミラ・ロンダリング。そしてマフィアと政治家の癒着……どれも遊撃士が直接には介入できない問題です」
ランディが、確かに、と言いながらうなずく。
「『支える籠手』の力にも限界はあるという事ですか……」
ティオがロイドの言葉に同意するようにつぶやく。『支える籠手』とは、遊撃士教会の紋章のことであり、遊撃士そのものを指す言葉でもある。
「――でも、警察なら本来それが可能なはずです。現実として、さまざまな壁が立ち塞がっていたとしても……そうした壁を突破できる可能性はゼロじゃないはずだ」
ロイドの言葉に、エリィの表情が少し明るいものとなる。
「遊撃士が介入できない、解決できない事件も、支援課ならその可能性を見出せるかもしれない……つまり、そういうことね？」
エリィの方を向き、ああ、と力強くうなずく。しかしすぐに、弱気な気持ちが首をもたげてしまったらしい。
「ちょっと楽天的すぎるかな……？」
「……現実はそこまで甘くないと思いますけど」
いきなりティオにチクリとやられ、苦笑するロイド。しかし、ティオはふっと表情を緩め、微笑んだ。
「ただ、どんな可能性もゼロでは無いのは確かです」
「ティオ……」
思いがけない言葉にロイドが驚く。そんな様子を見て、ランディがあきれつつも愉快そうに笑った。
「やれやれ……不良の頭とタイマン張ったり、危険な囮役を買って出たり……真面目で大人しそうな面して大した熱血野郎だぜ」
「別に熱血ってわけじゃないと思うけど……」
軽く頭をかくロイド。ふと真面目な表情になって、かみしめるように言葉を紡いだ。
「――でも今回、みんなと一緒に仕事をしてて改めて思った。お互い、まだまだ未熟なところはあるだろうけど……」
話しつつ、エリィたち支援課のメンバーを見回す。
「このメンバーだったらどんな壁も、力を合わせて乗り越えて行けそうだってね」
その言葉に、エリィ、ティオ、ランディの三人は、一瞬虚を突かれた。
「ロ、ロイド……」



頬を赤らめるエリィ。

「はは……なんつーか。」

頭をかき、視線をそらすランディ。

「……クサすぎです……」

ジト目になりつつも、どこか楽しそうなティオ。

「え、あの……」

自分の言葉が予想外の反応を引き起こして戸惑うロイド。

「ククク……ハーッハッハッハッ！」

そんな彼らを見て、セルゲイはこらえきれず爆笑した。

「そ、そんな笑わなくても。えっと……さすがに夢見すぎですか？」

セルゲイは笑いをこらえつつ、タバコを灰皿に押しつけた。

「クク……まあ、いいんじゃねえか？　『特務支援課』が設立されたのは色々なしがらみによるもんだが……その場所をどう利用するかはおまえたちの自由っちゃ自由だ」

そう言って、今度は声を出さずにニヤリと笑う。

「俺は直接、おまえたちに力を貸すことはないだろうが……やりすぎちまってもお偉いさんににらまれないよう、ケムに巻くくらいはしてやるよ」

「課長……」

無茶をしてもバックアップしてやる、と言外に言っているのだ。『色々なしがらみ』によって設立された特務支援課において、それがどれほど困難か、分からないロイドではない。そして、それをやりとげるだけの技量と才覚を、自分の上司が持ち合わせているだろうことも、ロイドには分かりつつあった。

「ふふ……要するに放任主義ですか」

「ったく、話が判るんだか、いい加減なだけなんだか」

「と言うより、ただ面倒なだけでは……？」

そのあたりの事情を知ってか知らずか、エリィやランディ、ティオなどは好き勝手に言っている。だが、この自由に発言できる空気こそが、支援課の強みなのだと、ロイドは理解していた。

「ま、ズルイ大人だからな」

そう言って、セルゲイは二本目のタバコに火をつける。

『特務支援課』が単なる遊撃士のパクリで終わるか。それとも新たな可能性を見出すことができるのか。――俺は煙草でもふかしながら、せいぜい眺めさせてもらうぜ」

セルゲイはタバコを吹かす。目を細めたのは、タバコの味のせいか、ようやく走り始めたひよっこたちを見守ることの楽しさのせいか。

「そんじゃま、こっちはせいぜい給料分ぐらいは頑張るとしますかね」

「ランディ。――それでは課長」

「うむ」
　セルゲイはふかしていたタバコを灰皿に起き、姿勢を正した。ロイドたちもそれにならい、気をつけの姿勢になる。
「不良グループの対立に関する捜査任務の終了を確認した。現時刻をもって、特務支援課は通常任務に復帰とする」
「了解！」
　ロイドたちの敬礼に、セルゲイも敬礼で応える。
「それじゃ行こう、みんな！」
「ええ！」
「……了解です」
「うっし、今日もやるか！」
　ロイドを先頭にエリィ、ティオ、ランディと続く。そのまま部屋を出て、支援課ビルの玄関へと向かう。
　玄関のドアを開け放つと、外は青空だった。心地よい風も吹きこんでくる。まるで、世界が彼らを祝福しているかのようだった。
　その中を、ロイドたちは小走りに駆け出していく。多くの人が行き交い活気あふれる街、クロスベルへと。
　仲間と共に街を歩きながら、ロイドは思った。
　これから先、いくつもの壁が立ちはだかるだろう。その前で、呆然となり、自分の無力さに打ちのめされる日が来るかもしれない。
　だが、それでも。
　仲間と共に走り続け、壁に挑戦し続けることが、今の自分にできるすべてなのだ、と。
　クロスベルの街の中を、ロイドたち特務支援課が駆け抜けていく。
　空はどこまでも蒼い。大きな雲がクロスベルの街を覆い、そして雲は風に流され、その形を変え、ちぎれていく。
　この世界では、空の女神（エイドス）が、はるか天空から人々を見守っているという。
　その女神の住まう世界から下界を見下ろせば、大地は緑深く、海は碧い。唯々、美しい世界が広がっているように見える。
　だが、実際は違う。
　美しい世界にすべく、日々悩み、あがき、戦う人々が、そこに暮らしているのだ。

第六章　抗争の疑惑（後編）　了

遊撃士協会 アニメ支部

英雄伝説 空の軌跡 THE ANIMATION 30TH Falcom ~Anniversary Festival~

アニメ版『空の軌跡』の最新情報を毎号レポート！



リリース情報発表!!

　アニメ『英雄伝説 空の軌跡』のリリース情報がついに発表。初回限定版には新規描き下ろしの特製スリーブのほか、縮刷版イベントパンフレットなど豪華特典も封入予定となっている。また、10月9日に開催が決定されたイベントのチケットが一般発売に先駆けて公式ＨＰで先行販売が受付中なので、こちらのチェックも忘れずに楽しみに待とう。







製品情報

発売日：2011年11月25日
価格：BD版6,090円　DVD版5,040円
収録時間：45分
発売元：バンダイビジュアル

○スタッフ
原作／日本ファルコム（英雄伝説 空の軌跡）　**監督**／橘正紀　**シリーズ構成**／上江洲誠　**キャラクターデザイン**／野崎あつこ　**アニメ制作**／キネマキトラス

○キャスト
エステル・ブライト：神田朱未　**ヨシュア・アストレイ**：斎賀みつき　**シェラザード・ハーヴェイ**：塩山由佳　**オリビエ・レンハイム**：子安武人　**ティータ・ラッセル**：今野宏美　**アガット・クロスナー**：近藤孝行　**クローゼ・リンツ**：皆口裕子　**レン**：西原久美子　**レオンハルト（レーヴェ）**：緑川光　ほか

※カットはPVのものです



月刊FALCOM MAGAZINE
Vol.06

発行人　吉田隆

発行協力　日本ファルコム株式会社

編集　小渕智幸
田中一寿

デザイン・DTP　さとうだいち

表紙ロゴデザイン　荻窪裕司（ビーニーズ）

発行　株式会社フィールドワイ
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/

制作・販売協力　シナノ印刷株式会社

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！



▲ギリアス・オズボーン　▲レクター・アランドール　▲ミュラー・ヴァンダール　▲F・ノバルティス博士

THE LEGEND OF HEROES
碧の軌跡 アオノキセキ 情報課通信

碧の軌跡の情報をいち早くお届け!!

新情報を続々公開!

9月29日発売の最新作『碧の軌跡』に登場する新キャラクターのイラストが到着。前作『零の軌跡』にも登場したエレボニア帝国の青年・レクターなど、『碧』の世界で今後彼らがどう関わってくるのかに期待が高まる。

■製品情報
●英雄伝説 碧の軌跡
発売日：2011年9月29日発売予定　**ジャンル**：ストーリー RPG
対応機種：PSP（プレイステーション・ポータブル）専用
UMD枚数：1枚　**メモリ**：未定　**プレイヤー人数**：1人
価格：通常版：6,090円（税込）　ドラマＣＤ同梱版：7,980円（税込）
完全予約限定版：9,240円（税込）
CEROレーティング：未定

ファルコムjdkバンド2011 サマーライブinニコファーレ

夏の祭典で盛り上がれ！



おなじみ『ファルコムjdkバンド』による真夏のライブイベントが８月１２日にライブハウス・ニコファーレで開催決定。ライブ当日は来場者にプレゼントのほか、マスコット「みっしぃ」など豪華ゲストも登場予定だ。詳しい情報が載った特設ＨＰを今すぐチェックだ。
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

英雄伝説 碧の軌跡 主題歌「碧い軌跡」先行配信

「碧」の世界を音楽で体感！

9月29日に発売されるプレイステーション・ポータブル専用ソフト『英雄伝説 碧の軌跡』の主題歌が7月25日に音楽配信サイト「iTunes Store」で先行配信されているぞ。「軌跡」シリーズのクライマックスを予感させる壮大な主題歌を、いち早く高音質で楽しもう。iTunes Storeにて配信。150円。

